

2021
秀作

第54回「おかねの作文」コンクール

「お助けポイント」から学んだもの

鹿児島県・三島村立三島片泊学園 7年 下戸 良佑

私はお金を使わない。それは私の両親も同じだ。毎日財布を持たずに生活している。なぜなら、私の住む黒島は、人口約200人の小さな島であり、コンビニエンスストアどころか、商店がなく、お金を使う場所といったら、自動販売機でジュースを買うときくらいのもだからだ。それもほんのたまに、母が機嫌のいいときくらいだ。

「ねえ、ジュースでも買ってきて。甘いのが飲みたいな。」

そのチャンスは突然訪れる。数枚の硬貨を握りしめ、自動販売機までダッシュする。「チャリン。」と小銭が入る。好きな飲み物を選び、ボタンを押す。選んだ物が「ゴトン。」と出てくる。最高だ。思わず笑みがこぼれる。自分で選び、お金を使って買う。この一連の作業が楽しみに思えるのは、この島特有のことなのかもしれない。

普段の島での買い物は、そのほとんどを、インターネットを通して行っている。食料も生活必需品も嗜好品も、何だってボタン一つで購入できる。私も必要な物があるときには、母に検索してもらい、画面を見て「これでいいかな。」と選び、母から了解が得られれば、「ポチッ。」とする。数日後にはフェリーによって品物は届けられる。でも、何か違うのだ。お金を介して行われる買い物の方が喜びというか、満足感が得られるのはどうしてだろう。それは、お金がもつ特性のせいではないかと私は考えた。

まだ私が小さかった頃、うちでは「お助けポイント」なるものがあった。家族を助ける「手伝う」とそれに見合ったポイントが入り、たまると1ポイント約10円程度に換金され、自分の欲しい物と交換してもらえる、といったものだった。しかしこれには厳しい三つのルールがあった。ルールその1「いつものお手伝いではポイントはもらえない。」ルールその2「『〇〇するからポイントを頂戴』はなし。」ルールその3「家族『ほぼ母』の助かり度によってポイント数

は決められる。」つまり、母がして欲しいことを予測して、自ら動くことが大切なのである。

「お母さん、洗濯物が乾いていたから取り込んでおくれね。」

「嬉しい。1ポイントゲットね。」

「庭の草が伸びていたからちょっと草むしりしたよ。」

「助かるな。3ポイントあげちゃう。」

など。気付いたらすぐにお手伝い。「母は喜んでくれるかな。ポイントはつくかな。」とちょっぴりどきどきしながら期待に胸を膨らませたものだった。まだ幼い私にできることはあまりなかったが、私はこの「お助けポイント」が結構好きだった。普段欲しい物があっても、なかなか首をたてに振らない母が、このポイントを使うと、何でも自由にお買わせてくれた。お菓子やおもちゃ、プラモデル等ポイントがたまってくると、何を買ってもらおうかとワクワクしたし、「あれが欲しい。」とお目当ての物を買ってもらうために頑張った時期もあった。「物を買ってもらえる。」という嬉しさや楽しさももちろんあったが、私はこの「お助けポイント」で、自分が見つけた仕事で母が笑顔になり、その上対価も与えられる、という点に喜びを見出すことができたのである。そう、お金とは、本来働いて得られる報酬であり、だからこそ、欲しい物と引き換えになることで、その物が大切だと強く感じるのだと思う。

確かに、インターネットで買い物をした場合でも、お金は動いているのだが、実感が伴わない面もあり、つい使い過ぎてしまったという話もよく耳にする。実際、インターネットで表示される画面の中には目をひく商品がたくさん並べられ、誘惑してくる。今はまだ、母の許可を得て調べたり選んだりしているので大丈夫だが、自分自身でインターネットを操作し、買い物を始めたら、と考えると計画的に購入していける自信が私にはあまりない。

だが私の母は、幼かった私に、お金の本来の役割や大切さ、そして働くことの尊さや誰かの役に立ったときの喜び、買い物の楽しさを教えたくて、「お助けポイント」を始めたのだと思う。そう考えると、あの頃の気持ちをいつまでも忘れてはならないように思えてくるのである。

私もいつかはこの島を離れるときがくる。その時に握るお金は、自分が働いて得たものであっても、両親が稼いでくれたものであっても、大事によく考え

て使いたい。また今後、インターネットでの買い物をはじめ、キャッシュレス化がさらに進んでいこう。そのような場合であっても、お金の価値を心に刻んでそれらを利用していききたいと思う。

「カシュッ。」ジュースの蓋を開け、一気に喉に流し込む。「ふはあ。」うん、やっぱり最高だ。

